



Data

監督：熊切和嘉
 原作：藤沢周『武曲』（文春文庫刊）
 出演：綾野剛／村上虹郎／前田敦子
 ／風吹ジュン／小林薫／柄本明

👁️👁️ みどころ

チャンバラと剣道はハッキリ違うはずだが、「武」の綾野剛に対する「曲」の村上虹郎を見ていると・・・？

藤沢周平ならぬ藤沢周の原作を熊切和嘉監督が映画化した本作は、綾野剛の筋肉美が強調されているが、本作の95%では綾野剛の飲んだくれ演技が突出！しかして、クライマックスでの天才剣士同士の対決や如何に・・・？

観客の少なさにびっくりしたが、今ドキの若者気質を考えるとそれもやむなし・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□このタイトルは一体ナニ？原作は？■□

「武曲」を「むこく」と読ませる本作は、数々の時代劇小説で有名な直木賞作家・藤沢周平と名前は似ているが全く別人の芥川賞作家・藤沢周の原作に基づく映画らしい。私はそんな作家自体を全然知らなかった。他方、熊切和嘉監督は、『夏の終わり』（12年）（『シネマルーム31』83頁参照）、『私の男』（13年）（『シネマルーム33』62頁参照）等で有名な有望株。さらに、矢田部研吾役で本作の主演を張る綾野剛は、『そのみにて光輝く』（14年）で素晴らしい演技を見せ（『シネマルーム32』166頁参照）、その後も『新宿スワン』（16年）（『シネマルーム35』未掲載）、『怒り』（16年）（『シネマルーム38』62頁参照）『リップヴァンウィンクルの花嫁』（16年）（『シネマルーム38』88頁参照）等で大活躍中の俳優だから、本作は必見！

しかし、今ドキ剣道の映画はめずらしい。かつては、市川雷蔵主演の『剣』（64年）という映画があったが、本作はそれと同じようなテイストの映画？本作は、「殺人剣の使い手」

と言われた矢田部研吾の父親・将造（小林薫）や、研吾の師匠で剣道範士8段の腕前を持つ僧侶の光邑雪峯（柄本明）が登場し、なぜ現在の研吾が飲んだくれ状態に陥っているのかの背景事情が説明されていく。他方、ラップの作詞に夢中の高校生羽田融（村上虹郎）になぜか剣道の才能があることを発見した光邑は、強引に融に剣道を仕込み、あえて研吾との対決を狙っていくことに・・・？

ちなみに、「武曲（むこく）」と言われても何のことかさっぱりわからないが、これは北斗七星の中の1つの星の名前らしい。そして、武芸（研吾が目指す剣道）と曲芸（融が目指すラップの道）の2つのことだそうだから、なるほど、なるほど・・・。

■□■綾野剛の肉体改造と飲んだくれの演技に注目！■□■

『新宿スワン』では、金髪に染めて新宿で暴れまくったかと思うと、『怒り』では、妻夫木聡との同棲ぶりがやけに板につく演技を見せていた綾野剛が、本作では、剣道の達人になるための「肉体改造」を断行し、背中の中のすごい筋肉美を見せてくれる。もっとも、それはクライマックスに向けたワンシーンだけで、本作の95%での綾野剛は髪ぼうぼうで髭ぼうぼうの飲んだくれ。いつも通っている大野三津子（風吹ジュン）が女将をしている小料理屋では、何と一人で2升も日本酒を飲んでクダをまいているだけではなく、ある日は「あんだ、親父の愛人だったのか？」と無礼な質問をしたり、急に抱きついてキスを求めたり、とハチャメチャだ。

幼少時から父親・将造の厳しい「指導」によって鍛えられ、剣道5段の腕前を誇っていた研吾が、なぜ今はこんな荒れた生活をしているの？それが本作の大きなポイントになるから、研吾と将造が見せる一瞬の父子対決シーンは、しっかり目に焼きつけたい。

■□■村上虹郎にも注目！3人のベテラン俳優にも注目！■□■

河瀬直美監督の『2つ目の窓』（14年）（『シネマルーム33』76頁参照）で俳優デビューし、その後『ディストラクション・ベイビーズ』（16年）にも出演していた（『シネマルーム38』未掲載）村上虹郎は1997年生まれの若者。その父親は俳優の村上淳、母親はUAだから、本作冒頭のラップ活動での有能ぶりはよく理解できる。しかし、どちらかというとやさ男タイプで、モデルでも活躍しているそうだから、剣道の達人の役はいかなもの？一瞬そんな心配をしたが、何の何の、意外にも・・・。

本作のストーリー構成では、ベテラン俳優の小林薫と柄本明が重要な役割を果たしており、それがピシッと決まっている。さらに、山田洋次監督の『家族はつらいよ』（16年）（『シネマルーム37』131頁参照）、『家族はつらいよ2』（17年）でも小料理屋の女将が似合っていた、私が昔から大好きな風吹ジュンも、本作ではきっちり自分の役割を果たしている。このようにベテラン3人の俳優がきっちりと自分の役柄を演じることによって、本作ラストで主人公の研吾と融が直接「対決」するシーンまでストーリーをうまく引

っ張っていくから、それに注目したい。

他方、荒れた生活をしている研吾の同棲相手(?)らしいカズノ役を演じている前田敦子は、近時『もらとりあむタマ子』(13年)、『シネマルーム32』125頁参照)、『Seventh Code』(13年)、『シネマルーム32』未掲載)、『モヒカン故郷に帰る』(16年)、『シネマルーム38』未掲載)等で演技派として急成長しているが、本作での役柄は?その存在感の無さとその扱いぶりは熊切和嘉監督の演出とは思えないほどひどいので、アレレ・・・。

■□■チャンバラと剣道の違いは?クライマックスの迫力は?■□■

剣道とチャンバラは、似て非なるもの。それは当然だが、本作導入部ではじめて竹刀を握った融が、「下段の構え」から一瞬の「突き」で先輩を倒してしまうシーンを見ていると、チャンバラも剣道も同じ?そう思ってしまう。しかし、将造が幼少期の研吾を厳しく指導している姿を見たり、将造と研吾との竹刀ではなく木刀での練習(?)ぶりを見るとやはり剣道はすごいということがわかる。さらに、本作中盤における、光邑によるかなり奇妙な融への指導ぶりを見ても、やっぱり剣の道は厳しいものだということがよくわかる。

本作が125分と少し長めになったのは、熊切和嘉監督が研吾と将造との対決による将造の大ケガ(植物人間状態)と、それによる研吾の剣の道への絶望というストーリーにこだわり過ぎたため。私はそう思わざるを得ない。そのため、酒ばかり飲んで荒れた生活を続けている研吾の姿があまりに長すぎて、少し退屈してしまうことに・・・。

他方、剣道とはこれほど厳しいもの。それを見せつけてくれるのが、本作ラストに訪れる道場内での研吾と融の2人だけの竹刀での直接対決だから、それに注目!剣道の大会は時々テレビで放映されているが、それを観ていても「一本!」と決めた時の迫力はすごい。さあ、本作のクライマックスに見る正式な剣道のルールに則った研吾と融の対決の行方は?熊切和嘉監督はそれをどんなカメラワークで見せてくれるのだろうか?それに大注目!

2017(平成29)年6月9日記